



# 優良事例表彰制度の概要

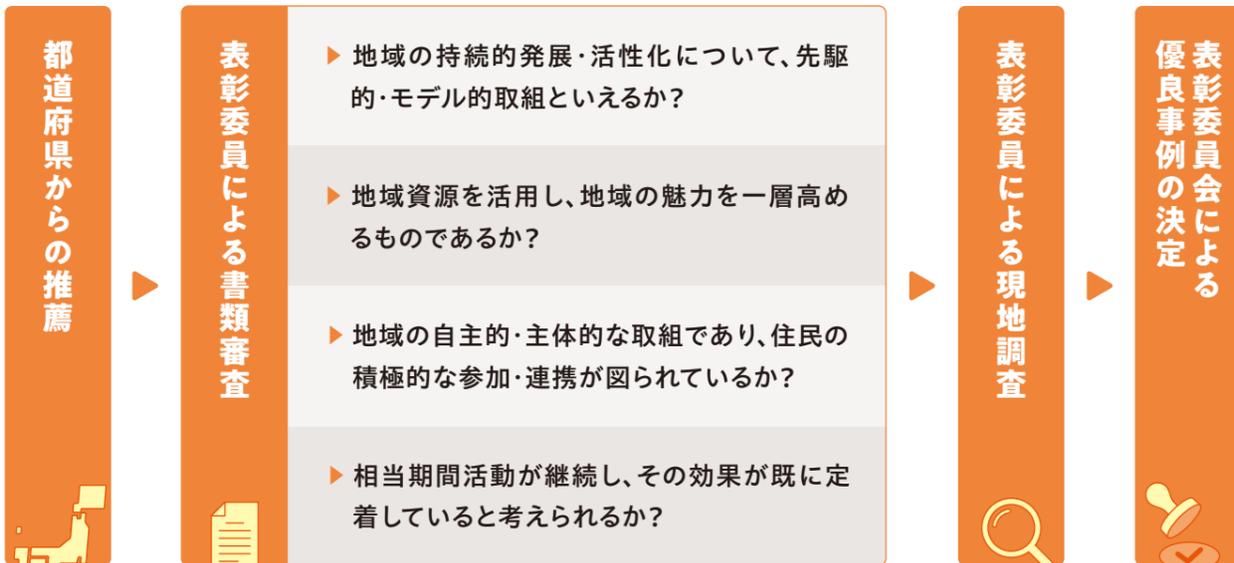


今日、過疎地域では、人口減少、少子高齢化の進展など他の地域と比較して厳しい社会経済情勢が長期にわたり継続しており、地域社会を担う人材の確保、地域経済の活性化、情報化、交通機能の確保及び向上、医療提供体制の確保、教育環境の整備、集落の維持及び活性化、農地、森林等の適正な管理などが喫緊の課題となっています。

一方で、過疎地域は、食料、水及びエネルギーの安定的な供給、自然災害の発生の防止、生物の多様性の確保その他の自然環境の保全、多様な文化の継承、良好な景観の形成などの多面にわたる機能を有し、これらが発揮されることにより、国民の生活に豊かさと潤いを与え、国土の多様性を支えています。

こうした中で、過疎地域の課題の解決に資する動きを加速させ、これらの地域の自立に向けて、過疎地域における持続可能な地域社会の形成及び地域資源などを活用した地域活力の更なる向上が実現するよう、全力を挙げて取り組むことが極めて重要です。

本制度は、地域の持続的発展と風格の醸成を目指し、過疎地域において課題の解決に取り組み、創意工夫が図られている優良事例について表彰を行います。



## 表彰式

**日時** 令和5年10月26日(木) 13時20分  
**場所** 富山県民会館ホール  
 (全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま 全体会会場)  
 富山県富山市新総曲輪4番18号

## 令和5年度表彰委員会委員 (敬称略)

 委員長 <b>宮口 侗迪</b> みやぐち としみち 早稲田大学 名誉教授	 委員 <b>指出一正</b> さしで かずまさ 「ソコト」編集長	 委員 <b>関司 直也</b> ずし なおや 法政大学 現代福祉学部 福祉コミュニティ学科 教授	 委員 <b>田中 輝美</b> たなか てるみ 島根県立大学 地域政策学部 准教授 ローカルジャーナリスト	 委員 <b>平尾 由希</b> ひら お ゆ き 株式会社FOODSNOW 代表取締役 フードコーディネーター
---	---	---	--	--

## 委員長講評 宮口 侗迪

本年度も表彰候補団体への各委員の視察を経て委員会で協議し、総務大臣表彰3団体、過疎地域連盟会長賞5団体を選定させていただきました。順不同で紹介させていただきますと、総務大臣表彰はまず、宮城県丸森町の**一般社団法人 筆甫地区振興連絡協議会**です。この協議会は2010年に住民全員で組織する団体に移行し、東日本大震災の苦難を乗り越えて、雑貨店と移動販売、GS、広報誌での発信、さらに太陽光発電の会社も設立し、億を超える予算規模を実現し、地区が総合的な活力を育て得ることを示しました。続いて新潟県長岡市の**山古志住民会議/ネオ山古志村(山古志DAO)**も、中越地震を克服して山古志DAOというコミュニティを結成し、電子住民票の機能を持つトークンを発行、800人弱の村にデジタル村民は海外も含めて1000人を超えます。「帰省」が移住につながり、先端的なシステムによる濃い関係人口は過疎地域のお手本です。そして富山県朝日町の**朝日町MaaS実証実験推進協議会**は、わが国で初めて事業者協力型の自家用有償運送を実現しました。バス停から遠い住民を近くの登録ドライバーが輸送する予約をタクシー会社が受け、コミュニティバスの回数券で支払う仕組みは合理的なアイデアで、その後他の自治体にも普及しています。

過疎連盟会長賞に移ります。福島県**昭和村**は、雪室でカスミソウの品質を向上させ、会津で昭和かすみ草というブランドを確立し、出荷量は全国一です。「かすみの学校」や子供たちへの「花育」などの取組は、20年間に36人の新規就農者をもたらすという素晴らしい展開です。また福島県田村市の**株式会社ホップジャパン**は、東日本大震災で遊休

施設となった場所でホップ栽培を復活、100%地元原料のクラフトビールを、多彩な役割のひと・もの・ことをつないで実現し、6次産業的に展開して地域に大きな希望を生み出しています。富山県氷見市の**論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会**は、県境近くで20年にわたって2つの自治会が連携し、特産物の継承に実績を挙げ、さらに合同の移住促進委員会を立ち上げて移住促進計画を策定するなど、地区の垣根を超える活動が評価されました。兵庫県豊岡市の**特定非営利活動法人 本と温泉**は、旅館の二世の会が志賀直哉来湯100年に「文学と歴史のまち」を目指して結成し、城崎に関する文学作品を新しく出版して地元でのみ販売するユニークな挑戦で、温泉町の品格を高める貴重な文化的活動といえます。最後に徳島県つぎ町の**家賀再生プロジェクト**は、傾斜地農業で世界農業遺産に認定されている地域の過疎・高齢化の流れに対し、地域外居住グループによる、藍栽培の復活・商品化を始めたこと、世界農業遺産の景観の継承にむけての貴重な活動です。

今年度も多彩な活動が表彰されました。行政と民間による特産物の育成や地域経済の活性化に加えて、デジタル村民や複数の地区の連携、外部グループの活動という新しい社会関係の育成が評価されたものからは、独立性の強いわが国の地区・集落に新しい風が吹いていることを感じます。地域交通のあり方にも新しい流れが生じ、出版という文化的な活動も生まれたこと、そして震災後の新しい展開が3団体あったことを、過疎地域のさらなる活力への息吹と受け止め、講評とします。